

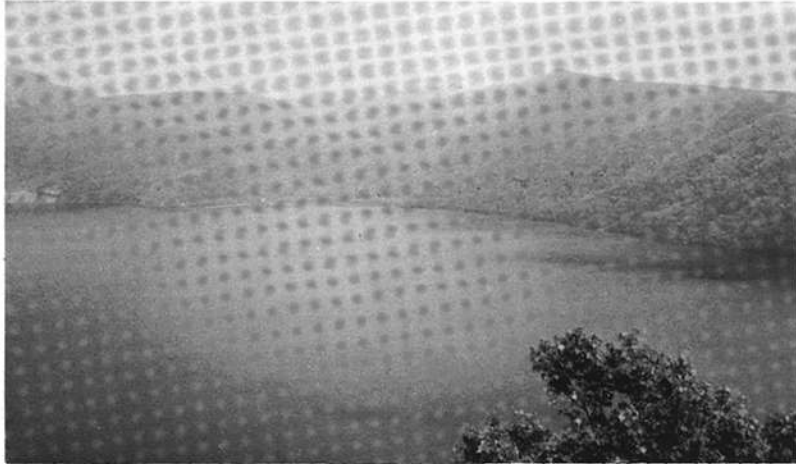
想い出多き研修旅行



研修旅行
特集号
発行
洛星新聞局
京都市北区小松原南町
☎(463) 3281(代)
印刷/南片桐軽印刷



長崎・平和祈念像



霧の摩周湖 ▲
札幌・夜の時計台



中学研修旅行

中学・高校を通じて最も思い出に残るであろう研修旅行。今回は文化祭・体育祭と切り離し、独自に特集してみた(な
お、中学研修旅行はM3Aの辻英史君に依頼した)。

高校研修旅行

【第一日】

西行千里夢のようだが、長崎に着くのに僅か七時間。日本を半分縦断する間、延々と続く休み時間に、いっただいふんざりしてきた所で、授業開始のベルより早く汽笛が鳴り、研修旅行最初の教室に着くのである。

【第二日】

九月二日の陽が高い内からバスで国際文化会館へ向った。ここは、ビルというより原爆の資料を積み重ねてセメントで固めたものであり、どの階も人のうめきに埋まっている。そのむごさに息苦しくなったら、ペランダに出てみるといい。長崎は日本に幾らでもある都市と少しも違わない。なるほど原爆は人の命は奪えるが、人の心までは溶かせない。

平和公園には、でっかい祈念像の周りに腐るほど石碑がある。いちいち建てるぐらいなら、まとめて被爆者への援助金にすればいいのに、いかにも安易さを好む日本人らしい。

【第三日】

翌三日目は普通修学旅行生を嘲笑う我がが、たつぷり恥をかく番の市内別荘研修である。くたくたになりバスガイド嬢の饒舌にうんざりしながら雲仙に向ってそこで一泊する。

【第四日】

四日目は九州を半分横断し、かの大阿蘇に到着。阿蘇はでかい。「盆の上に茶碗が伏せてある」とはよく言ったものだが、その盆の中に京都市が四つも入るとなれば尋常ではない。人間はノミのように歩いていく。

しかし、阿蘇はコンクリートで縁どられたアスファルトの帯で山頂までがんじがらめに縛られている。山頂には吹出物のように退避壕が散在している。ロープウェイが目障りに行ったり来たりしている。おまけにノミのように、うようよかましまし人間達。一体人間はどこまで観光という名の自然破壊を許しているのか。金もうけの為に自然を独占しているのか。これら全ての横柄でゴミばかり出す観光客の為であり、もつと腹立たしいことに自分もその一員なのである。

アルトの帯で山頂までがんじがらめに縛られている。山頂には吹出物のように退避壕が散在している。ロープウェイが目障りに行ったり来たりしている。おまけにノミのように、うようよかましまし人間達。一体人間はどこまで観光という名の自然破壊を許しているのか。金もうけの為に自然を独占しているのか。これら全ての横柄でゴミばかり出す観光客の為であり、もつと腹立たしいことに自分もその一員なのである。



【第五日】

明けて五日目。九州横断の残りにかかる。まずかの岡城である。目もくらむ絶壁に見上げる石垣。職人達の根性は大いに尊敬されるべきだが、これはどの堅城を築く必要がこの地にあったであろうか。次の臼杵の石仏もそう。草深い山中にわざわざ石仏を刻み、廃仏令でぶ壊し、戦争とい

って放置したかと思えば、文化財と騒いで保護する。人間は本当に無駄が多い。別府港に着き、いよいよ九州と、そしてバスガイド嬢とお別れである。巨船さんふらわあ号に乗る。早朝に大阪南港に着き、瞬く間に京都。いやはや全く夢のような旅であった。(紙面の都合上一部省略させていただきます)

【第一日】

朝、7時20分京都駅に集合。ひかり262号に乗り込む。3時間かけて東京へ着いたが、疲れたなどと言ったられない。まだまだ先は長い。上野でやまびこ53号に乗りかえ、仙台へやって来た。

まずは青葉城跡。伊達政宗の像が雄々しい。松島海岸へも行ったが、あいにく曇天で美しいとはいえない。ここは、いわば前菜のようなもの、まだまだ気分も乗り切らなかった。名物ささかまは安かったが、さて、ここから16時間フエリーにゆられて北海道へ向かうわけである。飛行機事故のアオリで航空会社を泣かせたのがいたしかたない。

【第二日】

昼ごろ苫小牧に上陸。クラスごとにバスに乗る。この先6日間お世話になる、長い付き合いである。車窓から見える外の風景はまた「広い」。山に囲まれた京都とは違う意味での、広大な美しさがある。日勝峠から眼下に眺めても、濃い緑が目についた。然別湖に着く。今夜はこのホテルに宿泊するのだ。クチビル山というのがある。湖に山の影が映り、クチビルに見える。と教えられた。緑色の不気味な唇であった。暗れ、阿寒湖が美しい。この目玉商品は何かといつてもマリモ。マリモの歌も覚えてきた。ところが「霧の」摩周湖には少しも霧がかかっていない。かなり雲行きは怪しいのに。怪獣映画のセットのような硫黄山に立ち寄り、屈斜路湖へ。クッシーは現れなかつたが、美幌峠から見下ろす酸性の湖は青く美しい。峠では風ビュービュー、少し寒かった。



硫黄山

【第四日】

網走では3コースの内1つ選択して研修せよ。というわけで3組に分かれいつもと違うバスに乗っての出発だった。が、この日は一番ひどかった。「天候ハ、ワレララ見放シタ」雨にたたられ、予定変更したり、時間が余り過ぎたりで大変でした。そんな中で薄暗いオホーツク海、そして残雪が印象的だった。

【第五日】

東北道に別れを告げ、一路札幌へと向う。北見、石北峠で小休憩。天候が悪く、何も見えない。正午頃層雲峡に着く。「銀河流星の滝」なる思わす赤面してしまふような派手なネーミングの二つの滝をバスから下りて見物。なかなかのモノで、派手なネーミングにも納得。昼食は名物石狩鍋であったが、普通の鍋料理との違いを見せず、サケが入っているからだろうか?

その後、層雲峡の続きをバスは走る。観音岩、マリア岩等の奇岩、絶壁が眺められた。少々こじつけめいたのはいるが、何でも擬人化してしまふ人間の想像力に感嘆。層雲峡を出てからは大して見るものもなく、夕暮時に札幌に到着。層雲峡を出た少し後に見えた雪をかぶった大雪山と辺りの野原は見事な美しさをかもしだしていたが...

【第六日】

晴れ。野幌森林公園見学と市内研修にはもってこいの日である。メインの市内研修を差しのけるに森林公園はよい。あの奥深さは圧巻である。せせこましい京都などでは感じられない広大さと解放感を満喫できる。皆が市内研修に行っても幾らかのグループはしぼり残っていたらしい。

市内研修は各班自由であり、昼・夕食を勝手にとるぐらいであるが、入念に計画しておかないと大した行動もせず、後で悔み結果になりかねない。コースとしては時計台やテレビ塔が好まれたようだ。

【第七日】

とうとう六日間の長旅に別れを告げる日が来た。一同シンミリと、と思いきや、大いに盛り上がりつつあるところが多かったようだ。何となくもまだ三十二時間船中経過さねばならないのだ。

我々はこの旅で大なり小なり貴重な経験をしたが、まずは無事に帰途につくことができたのである。

笠 人は常に様々な欲望を持つ。富、異性、地位、権力等、その内容は様々だが、それらの中でも「究極の欲望」と言えるものが、「不老不死」ではないだろうか。「人はいつか死ぬ。私は人である。ゆえに私はいつか死ぬ」というのは、あまりにも有名な三段論法であるが、この「私は死ぬ」から逃がれようとした者の古来から何と多い事か。それを追求する方法は、洋の東西を問わず存在し、中国千年の昔から一般に広がっていた仙道がそうであるし、ヨーロッパの錬金術もその一端だろう。

死を恐れる気持ちは人間共通のものだが、その傾向は寧ろ先進国のエリート層に強い様である。唯物論者にとつて、死は自我の消滅であるから、恐怖感を抱くのも無理はない。しかし、はたして「不死」が本当に幸福をもたらすのか。半村良の小説「石の血脈」では「現代社会においては所詮「不死」も商品としてしか存在し得ず、一握りの権力者のみがその恩恵を得るであらう」と書かれている。また、手塚治虫の作品「火の鳥」未来篇で、山之辺マサトは火の鳥から不死を授けられ、苦悩しながら孤独の中、実に三十三億年も生き続ける。これらは真に幸福と呼べるもののなか否、「不死」とは結局人類の手に余る、重過ぎる十字架なのだ。ビッグルは「最後のユニコーン」の中で、魔術師に不老不死の存在であるユニコーンに向かって、こう言わせている。「死ぬことの出来るものは、すべて美しい。永遠に生きる事の出来る、世界で最も美しい生き物であるユニコーンよりも美しいのです。」「一期一会」という言葉がある。有限の命を持つ生き物から、一瞬一瞬を懸命に生きるからこそ無限の意味を持つのではないだろうか。

